

# 万葉集 2535 番歌の「行者不念」の解釈について

竹生 政資\*

## An Interpretation of the Second Phrase of the 2535th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU

### 要 旨

万葉集 2535 番歌は「おほろかの ころは (わざとは) 思はじ 我がゆゑに 人に言痛く 言はれしものを」と訓読され、その意味は「通り一遍の気持は抱きますまい、私ゆえに人からうるさく噂されたものを」のように解されている。しかし、この歌の第二句原文の「行者不念」を「ころは思はじ」や「わざとは思はじ」と訓むことには問題がある。また、この歌の意味についても通説のような解釈では作者の意図が伝わってこない。というのは、「通り一遍の気持は抱きますまい」という作者の強い決心が、なぜ「自分が原因で人からうるさく噂された」とことと関係するのか、よく理解できないからである。本論文では、特にこの歌の第二句原文「行者不念」の解釈に焦点をあてて検討を行い、歌の意味が通るような新しい訓み方と解釈を提案する。

#### 1. はじめに

本論文で取り上げる万葉集 2535 番歌は、古今の相聞歌を収めた万葉集卷十一の「正述心緒」の歌の一つである。「正述心緒」とは「正に心緒を述べし歌」の意で、恋情表現が直接的であり、何らの媒材をも用いないことによる命名である ([1], p.3)。本論文の目的は、2535 番歌の特に第二句の訓み方を見直し、歌全体の意味が通るような新しい解釈を提案することである。まず歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう [1]。

11/2535 おほろかの ころは思はじ 我がゆゑに 人に言痛く 言はれしものを  
【原文】 凡乃 行者不念 言故 人尔事痛 所云物乎

次に、先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、現代語訳、注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

---

\*佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)  
公開鍵指紋: 11C0 DBB6 369C DB72 DD3A B122 EF6B 5B5E B99A C2E7

① 新日本古典文学大系<sup>[1]</sup>

【訓読文】おほろかの ころは思はじ 我がゆゑに 人に言痛く 言はれしものを

【現代語訳】通り一遍の気持は抱きますまい。私ゆえに人からうるさく噂されたものを。

【注釈】古典文学大系は、第二句原文の「行」を「ころ」と訓んだ。沢瀉『注釈』、『全注』などもこれを支持している。「行」を「ころ」と訓む例、既出（一七四一）。名義抄にも「コ、ロ」の訓を載せる。「行」を「わざ」と訓む従来の説も行われている『全注釈』『私注』、窪田『評釈』、佐佐木『評釈』、古典文学全集など。

② 新編日本古典文学全集<sup>[2]</sup>

【訓読文】凡ろかの わざとは思はじ 我が故に 人に言痛く 言はれしものを

【現代語訳】ひととおりの お気持とは思いません わたしのことで 人からひどく 言われたのですもの

【注釈】凡ろかのわざとは思はじ——オホロカは通り一遍の意。ワザは何らかの深い意図に基づいた行為。ここは悪意・嫉妬による第三者の非難・中傷に対して相手が迷わず誠意をもって釈明したことを、自分に並々ならぬ好意を持ってきている証拠と感謝して言う。○人に言痛く言はれしものを——コチタシはコトイタシの約。モノワは逆接だが、思ハジという否定表現にかかっているため、順接と解することも可能。

③ 講談社文庫（中西進）<sup>[3]</sup>

【訓読文】おほろかの 行とは思はじ わがゆゑに 人に言痛く 言はれしものを

【現代語訳】通り一ぺんの事とは思うまい。私のために人からあれこれとうわさされたものを。

【注釈】おほろかの——並一通り。「おほ」→二五三二。○行——する事をワザ、出来事をコトという。○言痛く——こと（言）いたく（痛）。

④ 万葉集註釈（澤瀉久孝）<sup>[4]</sup>

【訓読文1】凡の 心は思はじ 吾が故に 人にこちたく 云はれしものを

【訓読文2】凡の 行とは思はじ 吾が故に 人にこちたく 云はれしものを

【現代語訳】なみなみの心を私は持ちますまい。私の故に人にうるさく噂を立てられた仲なのですから。

【注釈】凡の心は思はじ——これも嘉は無訓。文以下オホヨソノワザハオモハズ、童蒙抄ワザハオモハジ、略解オホカタノワザトハオモハズ、総釈オホヨソノワザトハオモハジ、大成本文オホロカノワザトハオモハジとした。「凡」はオホ（二五三二、二・二一七）ともオホロカ（六・九七四、七・一三一）とも訓むので、ここはオホロカノがよいであらう。「行」は「行事」をワザと訓んだ例（二・九七、四・四九八、九・一七五九）があるので、「行」もワザと訓む事が出来よう。さうすると二人の仲をなみなみの事とは思はない、といふ意味になる。代匠記に「大カタノ人ノツラキワザヲ思ヒモトガメズ」、考にも「夫子がしわざの恨むべき事もあれど、こゝはかけてもいひ念ふまじきと云り」とあり、それに従はれてゐる人もあるが、少し考へ過ぎであり、「君とわが中を、たゞ一通のことゝは思ひ侍らじ」と古義にあるのでよい。これは一つの訓釈である。然るに古典大系本にはオホロカノコ、ロハオモハジとし「私は通りいつぺんの心は懐きますまい」と訳された。「行」をコ、ロと訓む事は前（九・一七四一）に述べた。「心は思ふ」とか「心思ふ」とかいふ云ひ方は今はしないが、万葉時代には、「心で

は思ふ」とか「心を持つ」とかいふ場合に用ゐる事「心者雖念」(四・四九六)、「情念而」(七・一二四五)の条で述べた如く、殊に「於煩呂加爾 己許呂於母比豆」(廿・四四六五)の例がある事を思ふとオホロカノコ、ロハオモハジと訓む事は十分認められると思ふのである。さう訓めば、「心」は自分の心で、私はなみ大抵の心をあなたに持ちますまい、といふ事になる。いづれでも歌意は通じ「わざとは」の訓釈も捨て難いやうにも思はれるので、姑く両説をあげておく。

## ⑤ 日本古典文学大系<sup>54</sup>

【訓読文】おぼろかの 心は思はじ わがゆゑに 人に事痛く 言はえしものを

【現代語訳】私は通りいっぺんの心は懐きますまい。私のことがもとで、人々にあれこれとひどい噂を立てられなさったのだもの。

【注釈】おぼろかの——並々の。通りいっぺんの。○心——原文、行。名義抄、行ココロ。○事痛く——仰々しく。

上に示した五つの先行研究を見ると、現代語訳の内容はいずれもほぼ同じであるが、第二句の原文「行者不念」をどのように訓読するかで大きく二つに分かれている。①と⑤は「心は思はじ」、②と③は「わざとは思はじ」、④は「心は思はじ」と「わざとは思はじ」の両方を示した上でいずれとも決め難いとしている。

次の第2節では、上に示した五つの先行研究の問題点を指摘し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新たな解釈を提案する。

## 2. 先行研究における問題点

前節に示した先行研究には少なくとも三つの問題点がある。第一に、解釈された歌の内容が不自然なことである。前節の①～⑤の現代語訳を何度読み返しても歌のメッセージが伝わってこない。現代文学ならいざ知らず、実直な万葉人の歌とはとても思えない。その原因は、「通り一遍の気持は抱きますまい＝深い気持ちを抱こう」という作者の決意が、なぜ「自分が原因で人からうるさく噂された」とこと関係するのか、よく理解できない点にある。この点に関して、新編日本古典文学全集は前節の②の注釈で、

ここは悪意・嫉妬による第三者の非難・中傷に対して相手が迷わず誠意をもって釈明したことを、自分に並々ならぬ好意を持ってきている証拠と感謝して言う

と説明しているが、もしこれが歌の意図であるならば、歌の後半部は「私ゆえに人からうるさく噂された時に、あなたが助けてくれたのですから」という内容になっていなければならない。しかし実際には、そうはなっていない。

第二の問題点は、前節の①、④、⑤が第二句の原文「行者不念」を「心は思はじ」と訓み、その意味を「～の心を抱く」と解している点である。①は原文の「行」を「こころ」と訓む根拠として1741番歌を例にあげているが、1741番歌の第四句原文「己之行柄」の「行」はもともと「心」となっている写本(西本願寺本など)も多いから確かな根拠にはならない。また、万葉集には「百重なす 心は思へど」(496番歌)のように「心は思ふ」という表現が全部で5例あるが(496、1401、2522、2699、

3367 番歌)、これらはすべて「心の中では思う」という意味であり、「～の心を抱く」という用法ではない。さらに、「心には 千重に思へど」(2371 番歌)のように「心には... 思ふ」が全部で8例あるが(647、714、2371、2552、2910、2932、4011、4154 番歌)、この場合にもすべて例外なく「心の中では... 思う」という意味である。

以上のことから、もし 2535 番歌の第二句を「(おほろかの) 心は思はじ」と訓むならば、「(通り一遍の) 心の中では思うまい」と解するしかないが、これでは歌の意味が通らない。すなわち、万葉集の用例に照らして解釈する限り、「(おほろかの) 心は思はじ」という表現は通説が言うような「(通り一遍の) の心は抱くまい」という意味にはならないのである。

第三の問題点は、前節の②、③、④が第二句を「わざとは思はじ」と訓んでいる点である。万葉集には膨大な数の「思ふ」の例があるが、その中には「～と思ふ」、「～は思ふ」、「～に思ふ」などの例はあるけれども、「～とは思ふ」(活用形も含む)の例は一つもない。この事実は、「わざとは思はじ」という訓み方は万葉集的でないことを示唆している。

以上見てきたように、2535 番歌に関する先行研究には少なくとも三つの問題点があることがわかった。次節ではこれらの問題点を解消できる新たな解釈を提案する。

### 3. 万葉集 2535 番歌の新しい解釈

この節では、まず新しい解釈結果を示し、その後それぞれの根拠を個別に示していくことにしよう。まず 2535 番歌の原文、訓読、直訳、意識を示す。

【原文】凡乃 行者不念 言故 人尔事痛 所云物乎

【訓読】おほろかの わざには思はぬ 我れゆゑに 人に言痛く 言はれしものを

【直訳】(あなたを)「通り一遍の気持ち」には思っていない私(男)のせいで、世間からきびしく噂されることになってしまったものだ。

【意識】あなたを「通り一遍の気持ち」からではなく、深く本気で思っている私(男)のせいで、世間からきびしく噂されることになってしまったものだ... これから先どうしたものだろう。

上に示した新しい解釈のポイントは、第二句原文「行者不念」を従来のように「心は思はじ」や「わざとは思はじ」のように二句切れとして訓むのではなく、「わざには思はぬ」と第三句の「我」を修飾する連体修飾句として訓む点である。それに応じて、第三句も、次の歌の第二句と第三句を参考にして、「我がゆゑに」ではなく「我れゆゑに」と訓むのがよいだろう。

15/3727 塵泥ちりひぢの 数にもあらぬ 我れゆゑに (和礼由恵尔) 思ひわぶらむ 妹がかなしさ

以上のように訓むことによって、歌の前半部と後半部の文脈がうまくつながるようになる。そこでまず、このような「訓み方」が妥当であるかどうか、以下の四つの観点から検討することにしよう。

第一に、新しい訓み方では、第二句が「わざにはおもはぬ」と8音になるが、母音「お」が含まれるから字余りの問題は生じない。

第二に、原文の「行」を「わざ」と訓む点であるが、「行事」と表記して「わざ」と訓ませた例が3

つあるから(97、498、1759番歌)、今の「行」は「行事」の「事」が省略された表記だと考えれば特に問題はないだろう。実際、従来も「行」を「わざ」と訓む説があった(第1節の②、③、④)。

第三に、原文の「者」を「には」と訓む点であるが、この訓み方の例は多数ある。例えば、今問題の2535番歌と同じ巻十一の歌で、かつ同じ第二句の例を2つ示すと、「色には出でず(色者不出)」(2523番歌)と「内には入らじ(内者不入)」(2688番歌)がある。

第四に、原文の「不念」を連体修飾句として「思はぬ」と訓む点であるが、「心ゆも思はぬ我し(心従毛不念吾之)」(1354番歌)や「相思はぬ妹をやもとな(相不念妹哉本名)」(1934番歌)などの例がある。

以上の四つの検討結果から、2535番歌の第二句原文「行者不念」を「わざにはおもはぬ」と連体修飾語的に訓むことは特に問題ないであろう。なお、このような訓み方が妥当であることは、部分的によく似た表現がほかの歌にもあることによって裏づけられる。以下に三つ例をあげる。

第一例として、今問題の2535番歌とその一つ前の2534番歌を比較してみよう。

11/2535 おほろかの わざには思はぬ 我れゆゑに 人に言痛く 言はれしものを  
11/2534 相思はぬ 人の故にか あらたまの 年の緒長く 我が恋ひ居らむ

この二つの歌の前半部を比較すると、2535番歌の「(おほろかのわざには) 思はぬ我れゆゑに」に対して2534番歌は「相思はぬ人の故にか」となっており、部分的によく似た表現である。

第二例として、今問題の2535番歌と次の498番歌を比較してみよう(カッコ内は原文)。

04/0498 今のみの わざにはあらず(行事庭不有) 古の 人そまさりて 音にさへ泣きし

二つの歌の初句と第二句を比較すると、2535番歌の「おほろかのわざには思はぬ」に対して498番歌は「今のみのわざにはあらず」であり、これもよく似た表現である。

第三例として、2535番歌の「わざには思はぬ」のように「には」の後に「思ふ」の否定形が続く例を以下に示す。

11/2399 あからひく 肌も触れずて 寝たれども 心を異には わが思はなくに

この歌の第四句「心を異には」は「あだな心では」という意味の副詞句であるから、第四句と第五句は「あだな心では私は(あなたを)思わないのに」という意味になる。

さて次に、「おほろかのわざには」という表現の意味について考えよう。万葉集には「おほろか」の例が全部で8つあるが、その内訳は「おほろかの」が1例(今問題の2535番歌)で、あとの7例はすべて「おほろかに」という副詞句である(7例のうち1つは「ほ」が濁音)。すなわち、「おほろかの」の例としては「おほろかのわざには」の1例があるのみで、ほかの7例はすべて「おほろかに」という副詞句である。このことは、「おほろかのわざには」という表現は実は「おほろかにには」という副詞句と実質的に同じ意味であり、単に音数の制約から「おほろかにには」を冗長な表現「おほろかのわざには」で言い換えたにすぎないことを示唆している。例えば、現代口語で、「いいかげんには思わない」を「いいかげんな風には思わない」と冗長表現するのと同じ発想である。

以上で述べてきたことを総合すると、2535番歌の前半部を「おほろかのわざには思はぬ我れゆゑに」

と訓み、その意味を「おほろかには思はぬ我れゆゑに」の冗長表現と見て「(あなたを) 通り一遍の気持ちでは思わない私ゆゑに」と解することは、万葉集のほかの歌にも部分的によく似た表現がいくつかあることから、妥当な解釈だと言えよう。

最後に、2535 番歌のその他の四つの課題について検討しよう。まず第一の検討課題は、この歌の作者の性別の問題である。第1節の④の澤瀉久孝氏の説明によると、この歌は女の作で、初句と第二句の意味に関して、契沖は「世間の人々からきびしく噂される結果になったことを咎めたりせず」と解し、賀茂真淵は「夫のしわざに恨み事はあるけれども決してそれを責めたりはしない」、鹿持雅澄は「夫とわたしの仲は通り一遍の関係とは思いません」、日本古典文学大系本は「私は通りいっぺんの心は懐きますまい」、それ以後はほぼこの解釈に従い、女が相手の男に対して「私はあなたに通り一遍の気持ちは抱きますまい」という気持ちを述べたものと解され、今日に至っているようである。

しかしながら、この歌には作者の性別に関する情報はいっさい含まれていないから、一般論としては、女の歌とも男の歌とも解せるけれども、万葉集の実例に照らして考える限り、この歌は男の歌である可能性が高い。というのは、世間の噂になった原因が男女いずれの側にあるかが明記された歌を調べてみると、以下に示すように原因はすべて男の側にあり、女に原因がある歌は見当たらないからである。

04/0626 君により 言の繁きを 故郷の 明日香の川に みそぎしに行く  
11/2398 年きはる 世までと定め 頼みたる 君によりてし 言の繁けく  
11/2455 我がゆゑに 言はれし妹は 高山の 峰の朝霧 過ぎにけむかも  
12/3114 極まりて 我も逢はむと 思へども 人の言こそ 繁き君にあれ

第二の検討課題は、2535 番歌の初句と第二句に「おほろかのわざには思はぬ」とあり、直訳すると「(あなたを) 通り一遍の気持ちでは思わない」という意味であるが、これが具体的にどういう気持ちを表しているかという点である。これについては、次の歌にあるように「ねもころに思う (心から深く本気で思う)」という気持ちを、否定形を用いて表現したものと考えてよいだろう。

12/3109 ねもころに 思ふ我妹を 人言の 繁きによりて 淀むころかも

第三の検討課題は、2535 番歌の結句「言はれしものを」の「ものを」の解釈である。万葉集の用例を調べると、「ものを」は逆接の用法が多いけれども、次の例に示すように詠嘆の用法もある。

04/0547 天雲の 外に見しより 我妹子に 心も身さへ 寄りにしものを  
08/1580 さ雄鹿の 来立ち鳴く野の 秋萩は 露霜負ひて 散りにしものを

今問題の「言はれしものを」の場合も、歌の文脈から考えて、上に示した二つの例と同じく詠嘆の用法と見るのがよいだろう。

第四の検討課題は、新しい解釈ではこの歌の骨子は「(通り一遍ではなく) 深く本気で思っている私のせいで、世間からきびしく噂されることになってしまったものだ」となるが、具体的に「私のどういう行為」が原因で人からきびしく噂されることになったのかという点である。本当の原因は知る由もないけれども、この問題を考える上でヒントになる歌がある。

11/2397 しましくも 見ねば恋しき 我妹子を 日に日に来れば 言の繁けく

この歌は、男が少しの間でも妹を見ないと恋しいと言って毎日訪れたために世間の噂になったというものである。今問題の 2535 番歌の場合も似たような原因だったのかも知れない。あくまでも憶測にすぎないけれど。

以上で述べてきたことをすべて考慮し、新しい訓読文に基づいて 2535 番歌を解釈した結果が、この節の最初に示した直訳と意識である。

#### 4. おわりに

本論文では、従来「こころは思はじ」や「わざとは思はじ」と訓まれてきた万葉集2535番歌の第二句原文「行者不念」の解釈に焦点をあてて検討を行い、結論として、「わざには思はぬ」と第三句の「我」を修飾する連体修飾句として訓むのが妥当であることを提案した。このように訓むことにより、訓読文として無理がなく(似たような訓み方の例がほかにもある)、また歌の文脈にも不自然さがなくなり、作者の意図も明確に伝わってくることを示した。以上のような解釈が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

#### 参考文献

- [1] 「萬葉集 三」、新日本古典文学大系、岩波書店、p.48、2002年。
- [2] 「萬葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、p.211、1995年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注(三)」、中西進、講談社文庫、p.46、1980年。
- [4] 「萬葉集注釋 卷第十一」、澤瀉久孝、中央公論社、pp.261-262、1962年。
- [5] 「萬葉集 三」、日本古典文学大系、岩波書店、pp.194-195、1960年。